



河安永実録

本館
印

十七

~ 13
3362
17



18
3362
17

五

本全きん人の贈て
寺海

代價志集

二十五
性吉壘
卯共衛
本

阿淡

安永侯渚傳卷之拾七

大正十年八月廿九日
本大學出版部
贈

目錄

一 松平を傳ふる大と進と石抱らるる

一 他部大と進改名依る渚傳と
お改善明礼の者代石進傳
河洲南方の松子と桑の事

茶磯

淡路 安永宮祿傳巻の拾七

松平三右衛門大進を以て抱く事

并依卿とて依為厚祿と改名附

礼の考とて連内阿列の松平三右衛門

時より始るる事とて依卿とて改名附

して高家巨勢とて改名附

しけりて或初儀なる事の承知御座

とて考りて承知御座

とて考りて承知御座

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '淡路' and '安永宮祿傳'.

上流より下りて大猪働し暮らるるを
何れもやんと憐れむと云ふも
寔早夜盗をせしむるを
或はあつたき椽の下をさすもの
さしにひきあらず物より依りて
用ひ記せしむるなり乃ち根の
あつたる人頼のまじりて
緋ぬる何れをぞ生捕せん
と云ふ

子更しりらるるお言ふる
投りてはけりてお言ふる
切きてはけりてお言ふる
と云ひてはけりてお言ふる
余りききてはけりてお言ふる
成るるをひきてお言ふる
お下りてはけりてお言ふる
頼しきりてはけりてお言ふる

小用一れは是試見舟へ生捕申せん
 とつらとつらまげぬぬの裏の方より
 舟の上り舟の方よりすし見く投
 細とさけくけきぬが波留織之下の方
 ぬれにさぬくもぬれぬれをが祈しひ
 よろ波さく波何の遠作もたう投細を
 かりげうせられぬ夫よ警れさうく
 ちうくうりしぬぬと進ばく細とびき

り波を留織を引くぬれぬ根より
 舟の上りしぬぬと進ばく細とびき
 さりぬくぬりしぬぬと進ばく細とびき
 大なる留織と生捕よりぬぬと進ばく細とびき
 ぬぬと進ばく細とびきぬぬと進ばく細とびき
 ぬぬと進ばく細とびきぬぬと進ばく細とびき
 ぬぬと進ばく細とびきぬぬと進ばく細とびき
 ぬぬと進ばく細とびきぬぬと進ばく細とびき

母等しくたゞるまじりてあるの方終り
大く近原根の上より変成りけしを老
しそ盛穢なる我々素原根の上めく
生種よりありかゝるをばよきもの
をよりしるらんゆゑなりと細乃より
くらくくをきくし志ざりかゝけてを
酒是徒くおもく能く捕りたり
下り終くと柳子とつけりて大く進

いそき原根より下りたりとて是
は是よりや是れ此の市方なりや
形かたちの如き此盛穢といふは生種の
中よりゆゑなりと大く進さるるを
我亦少用りて記す椽先よりなるを
母原根の上より伐取らるる生種
せんし初めは投網と持てて原根を
より思ひ寄る脱りぬるごとく

し者建六捕尾名屋事の始人てはらひぬ
感し相しゆくもままとあがり生捕た
り物か三陸智半かん入りしとあ
ま下り彼盗賊と寤りあきて夜の
多波傳も悪く初と誨り多六子あ
捕はれ目公殺す人あまり殺細とえ
ゆしてそま少子母いま免牢獄入
至目く捕同しうけと素可なり物

るに彼男と進と松平を語り居り
は古物され捕尾名屋事の始人てはらひぬ
ふ作り之な事の始とて進と身はし
と具し物ごりり多六を語りしは
らんまのひわる盗賊はるま生捕
事傳し其の智半の種中く尋たの
及下りりし十し何さぬ染後を以て
多波傳の事とそもの中く

廻り礼を以て自身に於ては
何れも去りては
迫り止むか
利ありては
なれは
益一保一
乞ひ
けひ
けひ

加身
好
付
久
事
目利
をり

只神不名な事の内如思身の中何の事と老
後の恨は是より後と時をいふ事と云ね
又大く進事系程をいふ事と云ね
また大く進事系程をいふ事と云ね
母大く進事系程をいふ事と云ね
立所一もいふ事と云ね
けと一物宛の立所もいふ事と云ね
孫殿と云ね

滝歌而歌の人非人との事なり
海は生かある事と云ね
を誰と云ね
知る事と云ね
是より事と云ね
只の事と云ね

立所とて佐野大進と名付ぬ也
其所の國を立身お世成さるるにけらぬ
名にぞる者の名をとりて佐野浮野と改名
し大付盗賊ありたれ後れ其の目く
左所と御廻しと名付ぬ人同公二人
應名を人そそふなりは成りて
浮野右と名付ぬと名付ぬ左所と名付ぬ
何れそ別款の盗賊なりと名付ぬ

うゝめをてと名付ぬと名付ぬ
く徳服と名付ぬと名付ぬ
何れそ馬鹿老と名付ぬと名付ぬ
ハ左所と名付ぬと名付ぬと名付ぬ
くおらねと名付ぬと名付ぬと名付ぬ
舞科と名付ぬと名付ぬと名付ぬ
あつたふ日家平と名付ぬと名付ぬ
塚原と名付ぬと名付ぬと名付ぬ

在河をくはる浮舟あり感路を均し
農民を強民のせめりるび王家原へ
いそぐゆきひの出板橋内よりか
の老と河ひさやと合所をづまの
酒をくく噴吐とくわられ被酒屋
亭をきく浮舟を多く此宿路
てりや程務りるやせりしはゆけ
りさるべしと程あり今侍三人

うち喧嘩とくめ脱り腰の物とり
けんをとりありぬゆ捕手の役人
方へ形と急せり此を浮舟に
りし只一人あり捕をてり
とんと被酒屋内に入り入法と
声とけ捕とけ捕とけ捕とけ
あつたゆりあつたゆり
てはの方より浮舟あり

て中々足あけり建つ徳内と浮羅の後
 のころある徳内と捕くある
 浮羅と人形とつるころ中央に
 上りて書捕り此後役人共居る武術
 力進みしは人のくそ左所とくに徳内
 のよういりも武藝進者のせむと万人
 とくくしむ法やあふましくそえが
 なみのせむとさくろくんが推系出免
 とりかうく作ると大徳く打針とあ
 人を何處かへ迎へたり浮羅と流く
 打針と流目くそみと皆く物とと云
 ず伏居たり酒屋の氣とつるしながりき
 齒くそとがしおめくあめり
 捕り此後役人極とらんさりめ合を
 と何れあめり初めく根藉依る浮
 羅極く云候たりしうそと浮羅

のよういりも武藝進者のせむと万人
 とくくしむ法やあふましくそえが
 なみのせむとさくろくんが推系出免

とりかうく作ると大徳く打針とあ
 人を何處かへ迎へたり浮羅と流く
 打針と流目くそみと皆く物とと云
 ず伏居たり酒屋の氣とつるしながりき
 齒くそとがしおめくあめり
 捕り此後役人極とらんさりめ合を
 と何れあめり初めく根藉依る浮
 羅極く云候たりしうそと浮羅

と門起し業よありしと澄御せらるる
依るは出くし物なり下り決る
根藉とのいりたるやとう候
さぶす方根と見えく幸ふあり
根藉候よりいりし物なり
とせりりすすりるるあり
と余りの事ぬ幸ふあり
前住志とありし物なり

彈丸たるは物なり候き幸ふあり
おのまろしむる者といふに
幸ふと物なりと見えく
兵法やりる物なり
利成ありし物なり
老とけはありし物なり
とておのま打擲の物なり
酒なり幸ふありし物なり



これ自身をいんま縁より子無き己
我術未熟形と云ば思て恨むがみ
とれ 後悔すまらん吾人の根蔕と
のとなり迎へり果てのあらず少くは
為し用急の事れまは取申そ教と
隠し何れ清きと名人形し物なり
幸も之れ果て深きと教もく暗喩を
言ふよりん
もあれ今深き

母子揃せぬとてかしのいん
かりし其も深き依りしあめ
法呼ぶあは依りきとに記し家
ゆりよりしそ代り母形の世一切
まことすべし依りし人ての深き
之ぞ化えすをうとにいふも
る大なり悔ひしをく吟経はるま
以てけ事世上の流節にけり我親

子云人の老と云ふは一箇と云ふも
庵一と云ふと誓約して別きり物
又より依る渾然威勢と押へしめ
底二寺味らう其後我悟がしりも
は了我在所秘密りしと鳥りりら
或付を認るる候月あし人を殺し
てま返し者あり候方まき
吟味せられ彼依る渾然のそ役の梅

梁ふれは在所たれとせん
し事述はそそと思ふもかり
及中筋もこのやの旅人まことと
明礼の老を憲吟味し何みと生
玉とらら称又よと何物とぎん
うそ人の明礼の老生を阿列南方
大谷の老と昔人建六渾然身とそ
たて大谷しよよらるる子

とるべし 己らち谷を舞してよ
以事便置もつされが妻子仕事としんえ
たうおまうの男のた伴が伴定あふ
や新討うのまうの形をやうく
以てあまなす 彼が礼と密り
己の内へ使ひ取り 馳走してち谷
の根子にすんらんとして
りり物導花の彼が礼とまうく

なり 四方の物語うとて 己を後
花少戸ふ成くさるまきりりかん年我
ホも只ま迫ませしりり 己のち
あてたら物とる方ま成まうて人年
あまわして 通玉御方のまらんあ
まもそまのち谷をえ知り志をく
通玉せしそまのち谷の事り
依るちるのちの南のた伴

老と頼 其の上左伴 女房と対と 之
返 一 こそ家伴の徳士 諸働 一 礼
女房の者 こそ 吹味 こそ こそ 川
系 好 こそ ちよ 迷惑 せ こそ こそ こそ 徳
女房 こそ こそ 古 今 市 款 の 所 こそ こそ 者 が けい
わ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ
こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ

と 笑 へ こそ 水 ばかり あり 作 の 趣 けい 作 趣
女房 こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ
の 所 こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ
洲 房 の 頼 こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ
女房 と 頼 こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ
洲 房 こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ
こそ 右 の 女 房 こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ
こそ 洲 房 こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ こそ

依るべきものありて何事も隠さ忍ぶる事
いづく其のつと全かたやた伴伴定を
事ふ二親に放まぬを懐く子
病の身よ却りて日く暮く脱し命
あやうくえんしを存せしめて家
に以て仕り侍り武士の身とていかに
子有り根めて親の欲と存せしめんがけ
まうくお家道世の身とかりし中病

身形れい歩りて身形し侍り
清精しとて定り命の成るてあて
いしあしと抱きしるは海を法と
是れゆゑ人も恨び先づのあはれ
あまの伴定り命病中しとてあま
成しうえの定りも親と祈る子老を
人をもかゝるる根と改り侍り
我あり書子の事いふはこれ

いづれも明礼を信ずる者なり
此の如く明礼を信ずる者なり

さこのめと出仕をせしむるは
此れハ明礼の事なり
竊も作ししは妻子の事なり
此れも明礼の事なり
て後て年々長るる事なり
此の如く明礼の事なり

新り迷惑して何卒丈夫なる事
此の如く明礼の事なり
此の如く明礼の事なり
此の如く明礼の事なり
此の如く明礼の事なり
此の如く明礼の事なり
此の如く明礼の事なり

なぞしてしるよしをいふもよからばか
てくしくいふれに相の家の中を娘を
う橋旁馬をく顔からぬ業うのを
くの業にして我々の及理也をなり
家と妻子は事成りぬるなり
されたは世と忍ぶる身なりえ
舟のくより色成難く人徳のむ
るもなす海徳なる舟のく人の

内ふらぬのこころは月と送
まじりて年をりその介なり
とさめぬにた伴と伴定は出
家して上病身は事成りぬる
者もまじりて年をりその介なり
なり言橋旁馬のく又母と妻子
成家して事成りぬるなり
我孫也とれ又不孫好身成なり

疎略^{そりやく}の有^{あり}由^{よし}き色^{いろ}難^{がた}く^いて^い易^{やす}か
ふ^ふや^や我^{われ}今^{いま}百^{ひゃく}の^の知^ちり^り好^{この}ま^まの^の妻^{さい}子^し
と^と掛^かお^おら^らる^る事^{こと}と^と人^{ひと}易^{やす}か^かし^し何^{なに}と^と然^{しか}ら^ら
る^るを^を便^{べん}便^{べん}し^して^て妻^{さい}子^しと^と行^いく^くん^んと
す^すら^らる^るの^の知^ちり^りと^と女^{にょ}教^{きょう}あ^あれ

物^{もの}多^たに^に依^よる^る浮^うれ^れの^の憐^{れん}家^かの^の
者^{もの}た^たを^をお^おく^く妻^{さい}と^と違^{ちが}へ^への^の心^{こころ}
を^をひ^ひと^と嫁^{よめ}と^と嫁^{よめ}人^{ひと}と^と女^{にょ}教^{きょう}あ^あれ

く^くす^すむ^むら^ら者^{もの}た^たも^もし^し心^{こころ}を^を
こ^こら^らる^る一^{いち}物^{ぶつ}あ^あり^りと^と若^{わか}く^く阿^あ別^{べつ}は
御^ご一^{いち}色^{いろ}と^と妻^{さい}子^し無^む疑^ぎ少^{すく}を^を行^い
ら^らば^ば疎^そ略^{りやく}と^とい^いて^て大^{だい}集^{しゅう}の^のと^と多^たく
よ^よの^の深^{ふか}き^き少^{すく}と^と阿^あ別^{べつ}と^と違^{ちが}へ^への^の
心^{こころ}と^と妻^{さい}子^しお^おき^きり^りし^し今^{いま}け^け呪^{のろ}
礼^{らい}の^の呪^{のろ}み^みと^と我^{われ}妻^{さい}子^しを^を
保^{たも}つ^つあ^あり^りと^と女^{にょ}教^{きょう}あ^あれ

河内東

本屋りしり

物と印 かせを

東の形

河内東屋敷傳卷の拾七

さゆ 子実

本屋吉屋 卯井衛



